紀　　要

第10号

— 目　次 —

序

縄文時代石器研究の方法論序説……（鈴　木　康　二）

弥生社会からみた独鈷石……（田　井　中　洋　介）

犬上川左岸扇状地における考古学的研究……（近江歴史クラブ）

犬上川左岸扇状地における須恵器編年試案……（畑　中　英　二）

犬上川左岸扇状地の古墳群について……（北　原　　治）

近江における階段式石室の検討……（堀　　真　人）

犬上川左岸扇状地における無袖式横穴式石室……（辻　川　哲　朗）

古墳時代後期から終末期にかけての土壙墓の問題点……（畑　中　英　二）

犬上川左岸扇状地の古墳にみられる習俗の研究……（畑　中　英　二）

犬上川左岸扇状地における馬具副葬土壙墓について……（山　中　由　紀　子）

犬上川左岸扇状地における古墳出土の土器様相について……（中　村　智　孝）

犬上川左岸扇状地周辺の生産と流通の概観……（畑　中　英　二）

東大寺水沼荘の開発……（神　保　忠　宏・畑　中　英　二）

「湖東系軒丸瓦」に関する基礎的考察……（重　岡　　卓）

古代王権論にむけて……（細　川　修　平）

日野町出土の瓦器椀をめぐって……（上　垣　幸　徳）

滋賀県伊香郡高月町井口集落周辺の水利と環境

井口城とその立地……（神　保　忠　宏）

水と環境教育……（佐　野　静　代）

1997.3

（財）滋賀県文化財保護協会

犬上川左岸扇状地における無袖式横穴式石室

辻　川　哲　朗

1　はじめに

(1)問題の所在

古墳時代後期の墓制を特徴づける横穴式石室は、当初片袖式・両袖式のものが主体をしめるが、その後次第に袖が退化して無袖化する傾向と、あわせて石室規模が相対的に小型化する傾向とがあることはおおかたの理解となっているようにおもわれる。このような〈無袖化・小型化〉は、果たして個別地域のおける内的・自立的な変化過程の結果であるのだろうか。それとも、無袖式横穴式石室という新しい墓室型式が外来的要素としていずこかにおいて出現し、拡散したのであろうか。

上述の問題点に迫るためには、個別地域における石室構造の変容過程を跡づけていくことが必要になるであろう。かかる問題意識を踏まえて、本稿では、犬上川左岸扇状地を対象として、該当地域の無袖式横穴式石室を検索し、その受容と展開過程を明らかにすることを第一の目的としたい。

(2)検討の方法

当該地域における横穴式石室は、そのほとんどが築造後現在に至る間に削平を受け、上部構造はもちろん、下部構造においても基底石一石を残すのみであったり、あるいはそれすら除去されて据え付け痕の確認だけに留まるものが大半を占めている。そのため、本来三次元的な構造物として検討されるべき対象ではあるが、上述した資料的な制約を前提とせざるを得ないのが現状である。そのため、今回は石室の平面構造に限定して分類を試みたい。平面構造―なかでも、石室の平面的構造と墳丘内での石室の配置という２点に着目した。

なお、本稿における土器の年代観は、本共同研究の畑中論文に基づくものであり、報告書の見解とは必ずしも一致しない場合がある。

2　無袖式横穴式石室墳にみる二相

(1)石室構造の分類（図１）

さて、当該地域における無袖式横穴式石室は、石室構造―とりわけ、羨道部と墳丘端部との関係という視点から、大きく以下の２タイプに分類できると考えた（以下、これらの類型を石室類型と記述する）。

１類：羨道が墳丘端部付近までのびるもの。極めて短距離ながらも素掘り墓道を接続するものがある（註1）。甲良町北落SX9301（図１―１：文献26）・同塚原A16号墳（文献38）・同金屋南１号墳（図１―２：文献47）が該当する。同塚原Ｂ４号墳（文献39）もこの例に含められる可能性がある。

２類：羨道が墳丘端部に達せずに終わり、その先に素掘りの墓道がとりつくもの。墓道と石室との接続部が段状を呈する場合もある。墓道の床面はフラットかやや墳丘外にむけて上がり気味である。墓道長の長短によって、さらに細分できる可能性がある。しかし、墓道は墳丘の削平に伴ってその先端部分を欠失したと思われるものも多く、今回は一括して扱うことにする。具体例としては、甲良町尼子10号墳（図１―３：文献22）等がある。

続いて、無袖式横穴式石室の墳丘内における配置傾向を検討してみたい。

(2)石室配置の分類（図２）

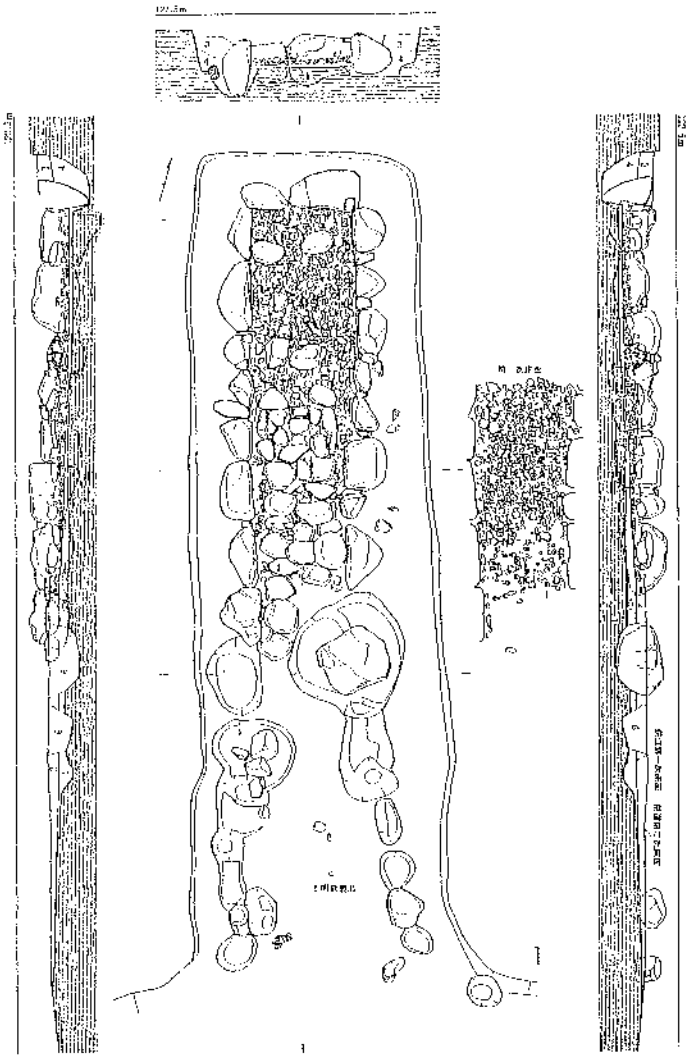
石室の配置傾向は、以下の２タイプに分けることができる（以下、この石室配置類型を配置類型と略称する）。

Ａ類：墳丘の中心点が石室の中央より奥壁よりに位置するもの。

Ｂ類：墳丘の中心点が石室のほぼ中央付近に位置するもの。

具体例を見てみよう。Ａ類の典型例としては、北落SX9301（図２―１）をあげることができる。この古墳は、径15mをはかる円墳であり、石室類型１類の無袖式横穴式石室を有する。石室の奥壁は、墳丘の中心点と近接した位置にあることが分かる。

一方、Ｂ類の具体例としては、尼子10号墳（図２―２）をあげたい。当該例は、一辺約10mを図る方墳であり、石室類型２類の無袖式横穴式石室を有する。墳丘の中心点がほぼ石室の中央部付近にある。



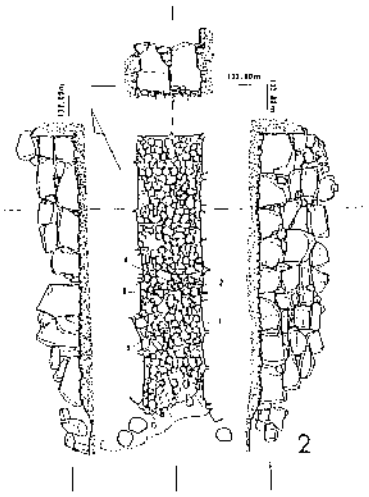
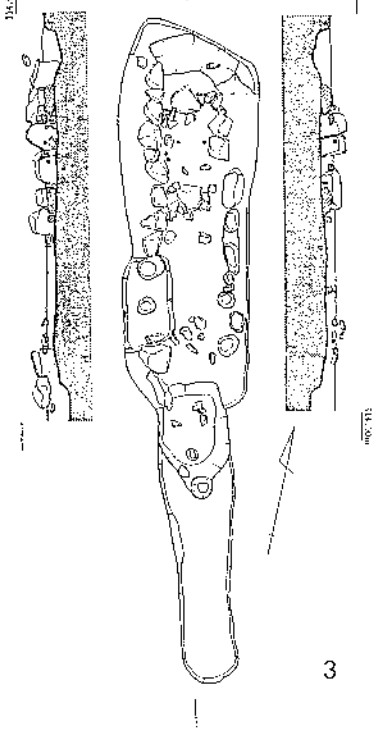
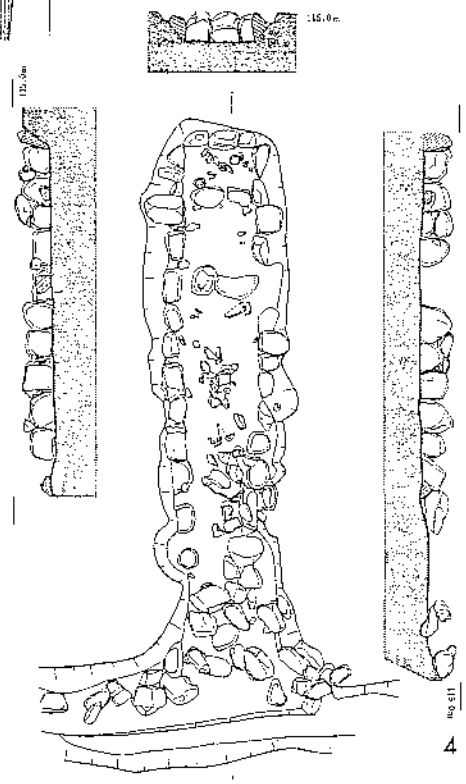


図１　無袖式横穴式石室の
諸類型（Ｓ＝１／80）

１：１類　北落ＳＸ9301（文献26）
２：１類　金屋南４号墳（文献47）
３：２類　尼子４号墳（文献22）
４：２類　尼子９号墳（文献22）





(3)石室類型と配置類型との相関関係

先に、1・2類という石室類型とA・B類という配置類型とを設定した。これらの類型間の相関関係を次にまとめてみたい。

まず、石室類型1類の場合、配置類型はA類が対応する。これを1A類と呼称する。具体例としては、先述した北落SX9301・塚原B4号墳・塚原A16号墳等をあげることができる。

一方、石室類型2類の場合は、配置類型B類が認められる。この一群を2B類と称する。具体的な事例としては、先述した尼子10号墳に加えて、尼子4号墳があり、尼子5号墳も本例に相当する可能性が強い（文献22）。

石室類型と配置類型との相関関係は、理論上先述した1A類・2B類に加えて、1B類・2A類が設定できる。しかし、当該地域においては、現状で後2者を確認することができない。ただし、1B・2A類については、他地域においてその実例を見出すことが可能である。

以上の検討から、当該地域における無袖式横穴式石室墳を2種の類型に分けることができた。

(4)各類型間の相互関係

上述した類型間の時間的関係については、ひとつに型式学的側面からの検討がある。石室の法量からみると、1類石室の場合、大型（全長約8m以上）と小型（全長3.7m程度）とがある。それに比して2類石室は相対的に小型のもの（全長約2.6～4.5m）に限定される傾向がある（図3）。石室の小型化という観点に立てば、1類→2類への変化が想定できる。

こうした型式学的検討に基づく変化過程は、伴出土器をはじめとする遺物によって検証されるべきである。しかるに、先述したとおり、当該地域の石室墳は著しい削平を受けており、遺物の残存状況も決して良好とはいえず、所属時期を推定するに足る資料は豊富でない。そうした限界はあるものの、一定の傾向を見出すことは可能である。

具体的に述べるならば、1A類の塚原B4号墳の出土土器は1段階新相に、北落SX9301・塚原A16号墳の出土土器は2段階に相当すると思われるものである。一方、2B類の諸例のうち、伴出土器の様相を比較的知りうるのは、尼子9号墳等わずかな例に限られてしまう。これらの土器群は2段階に相当すると考えられるものである。以上から、現状の資料による限り、1A類は2B類より先行して出現した可能性が指摘できる。このことは先述の変遷案を裏付けるものである。

さらに、無袖式横穴式石室と階段式石室との時間的関係についても一定の見解を提示することができる。すなわち、堀論文の検討結果に基づけば該当地域における階段式石室の出現時期が1段階中相に遡上する可能性があるのにたいして、無袖式横穴式石室のそれは1段階新相を遡らない、という点である。

(5)小結

以上の検討結果をまとめるならば、以下のとおりになろう。

・当該地域の無袖式横穴式石室の石室構造は、羨道部と墳丘端部との関係からみて、2タイプ（1類・2類）に大別する事ができる。

・当該地域における無袖式横穴式石室の墳丘内での配置傾向は、2タイプ（A類・B類）に分けることができる。

・当該地域の無袖式石室墳は、石室構造と石室配置との観点から、2タイプ（1A類・2B類）に分けることができる。

・無袖式横穴式石室墳の2タイプ（1A類・2B類）は、石室の型式学的検討によって前者から後者へという流れが見いだせ、伴出土器の様相からそれを裏付けることができる。

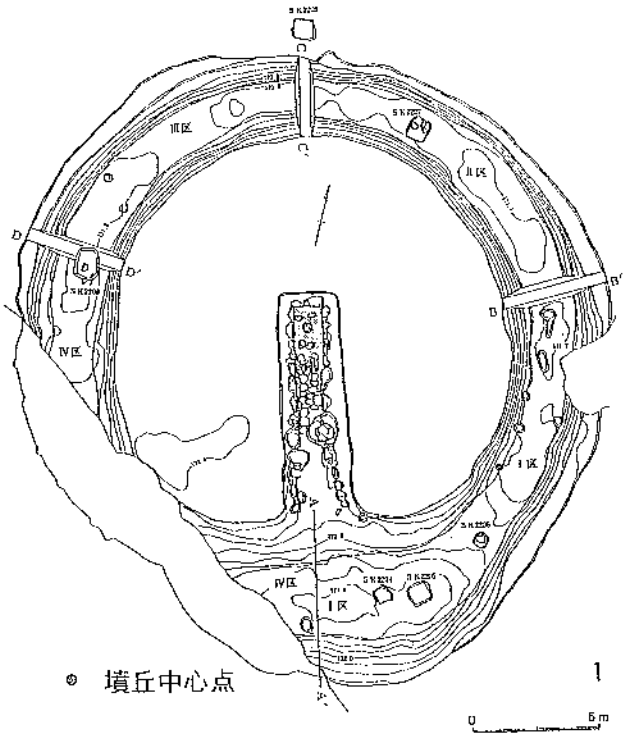
・無袖式横穴式石室は、階段式石室に遅れて出現する。

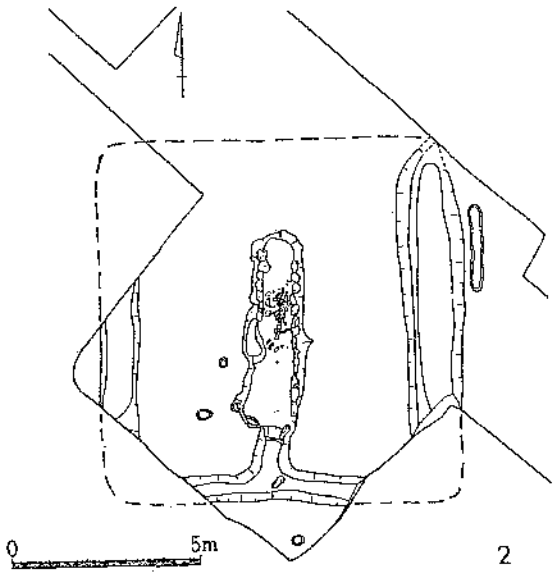
3　無袖式横穴式石室の受容と変容

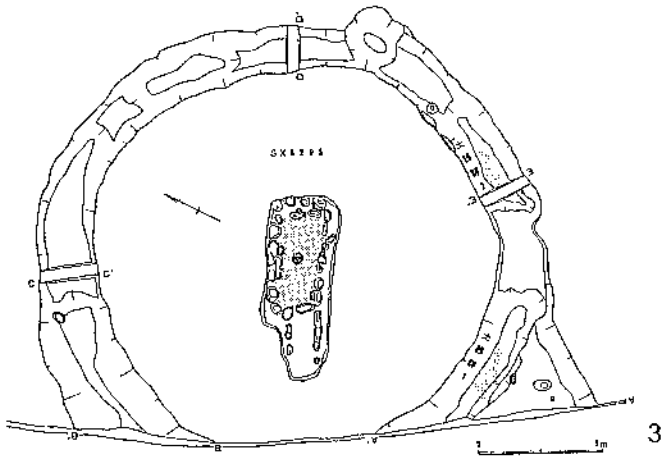
(1)2B類の位置づけ

最初に、2B類の位置づけについて検討してみよう。ここで問題になるのは、当該地域において無袖式横穴式石室に先行し盛行をみせた階段式石室である。それらのうち、墳丘と石室との位置関係が判明する例のほぼすべてにおいて、配置類型B類が確認できるのである。

具体例を見てみよう。北落SX9205（図2―3）は径約15mをはかる円墳である。墳丘のほぼ中心部







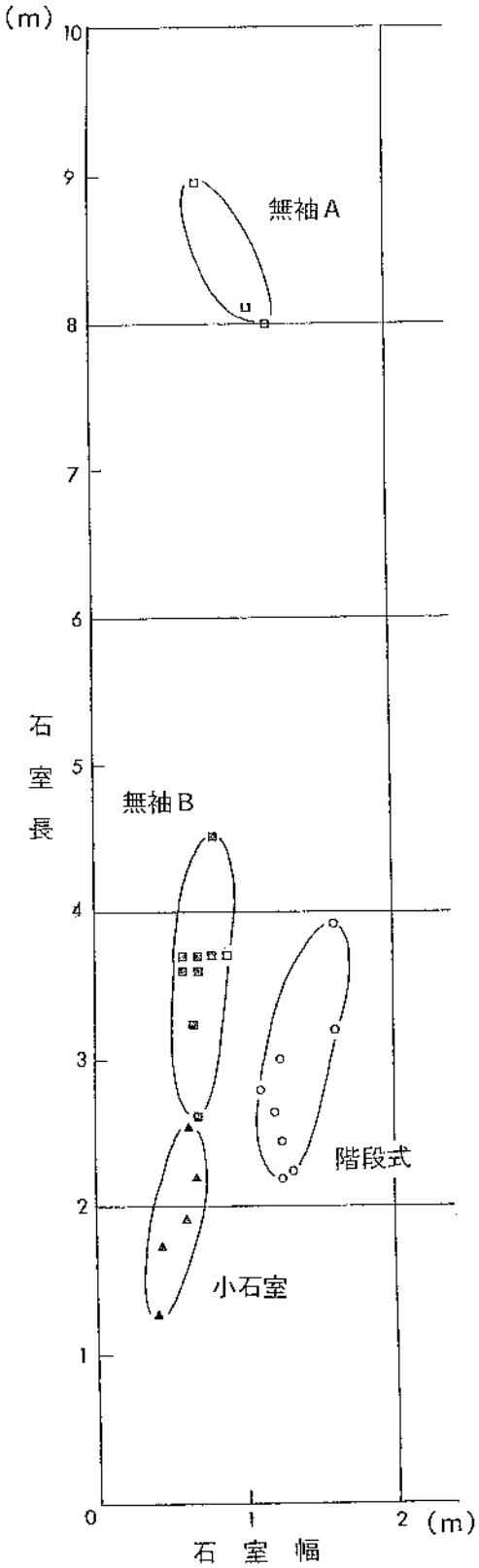


図3　石室法量グラフ

図2　石室配置類型
1．北落SX9301
2．尼子9号墳
3．北落SX9205

に階段式石室を構築する。玄室中央部に墳丘の中心部がほぼ重なっている。伴出遺物は１段階中相に位置づけられよう。

さらに塚原Ａ古墳群を例に加えたい。同古墳群は現状で約23基程度の古墳が検出されている。埋葬主体としては、階段式石室・無袖式横穴式石室・土壙墓が確認されている。これらのうち、階段式石室は１段階中相から２段階にわたって築造されているが、これらすべての石室は、その中心が墳丘の中心部付近にある配置類型Ｂ類の特徴を示しているのである。

階段式石室が無袖式横穴式石室に先行して出現した可能性は、すでに何度か指摘したところである。かかる傾向を考慮しつつ、あわせて階段式石室には配置類型Ｂ類が主体的に認められる現象を踏まえたうえで、当該地域における石室構築上の〈伝統〉として、石室を墳丘中心部付近に造営するという原理（配置類型Ｂ類）が存在した可能性を指摘したいのである。

⑵１Ａ類の位置づけ

そのような可能性を踏まえ、翻って１Ａ類をみてみると、石室類型・配置類型いずれの点においても先述の〈伝統〉からは導き得ないものであることが分かる。このような異質性は当該地域外から伝わった外来のものとして捉える方向を示すように思われる。この点について注目されるのは、近畿中央部の大型古墳に採用された横穴式石室の場合、墳丘中心部に奥壁が位置するように石室を造営する傾向がある点である。ただし、石室の中央が墳丘中心付近に重なって造営される場合が無いわけではない。とくに、丘陵部に造営された群集墳のなかには、墳丘の占地が制限されたためか、必ずしも先述した一般的傾向を見いだせない場合も多い。しかしながら、このような場合でも、石室の開口部は墳丘端部に設営されることが多い傾向を見いだせる（１Ｂ類）。今この問題については明確な解釈を見いだせないが、ここでは、１Ａ類の無袖式横穴式石室墳が地域内において先行する横穴式石室墳の流れからは隔絶した異質なものであり、外来的な要素として捉えられる点を確認して、先を進めたい。

⑶無袖式横穴式石室墳の変容の背景

かような想定に基づき、さらに無袖式横穴式石室の検討を進めると、当該地域において無袖式横穴式石室は当初１Ａ類の存在形態をとるものとして受容されたが、程なくして、先行して築造されていた階段式石室の石室構築原理―すなわち、石室を墳丘の中心に築造するという原理（配置類型Ｂ類）によって変容が加えられた結果生じた類型であるとして、捉えることができるのである。

さらに、このように考えると、石室類型２類において素掘り墓道が出現する背景についても一定の理解が可能になる。かかる素掘り墓道が石室に小型化に伴って出現したと単純に考えることは妥当でない。というのは、石室の小型化が実現されても、石室自体を墳裾よりに設置すれば、墳丘裾部に開口部を設けることは可能であるからである。そうならなかった現実の背景には、石室を墳丘の裾部に寄せて設置できなかった―換言すれば、石室は小型化すれども、あくまで墳丘中心部に造営することへの強い指向性があったため、石室への出入口を確保する一方策として素掘り墓道が出現したと考えざるを得ない。さらに、墓道との接続部に段状の施設を設けることを考慮すれば、このような墓室への往還方法を選択した背景には、階段式石室のイメージが指向されていた、と読みとることも可能であるように思われるのである。

⑷小結

以上の検討結果をまとめておく。

・１Ａ類は、石室構造・石室配置いずれの点においても非在地的な性格を示しているのに対して、２Ｂ類の場合、石室構造・石室配置両面において当該地域に特徴的なものとして捉えうるものである。

・無袖式横穴式石室に先行する階段式石室においては、配置類型Ｂ類を認めることができ、それは２Ｂ類の無袖式横穴式石室墳に続く該当地域の石室構築上の〈伝統〉として捉えることができる。

・当該地域においては、当初１Ａ類の無袖式横穴式石室墳が受容されたが、上述の〈伝統〉によって変容が加えられ、２Ｂ類の無袖式横穴式石室墳が生じた。

4　まとめ

以上、当該地域における無袖式横穴式石室墳を対

象として検討を試みた。その結果については、各小結において述べたとおりである。本稿をむすぶにあたって、冒頭に掲げた課題に立ち返り、関連する若干の問題点について触れておきたい。

(1)無袖化の外来性

横穴式石室の無袖化は、少なくとも当該地域においては、内的な契機によって生じたとは考えがたい。なぜなら、1A類が該当地域の先行する要素からは、導き出すことが困難であるからである。

ここで問題になるのは、今回の検討で見いだせた無袖化の外来性が普遍的なものとして捉えうるのか、という点である。すなわち、無袖化が少なくとも近畿地域において、ほぼ同一の時期に同様な変化現象として生じたのであり、当該地域例はあくまでイレギュラーなものとして捉えるべきなのか、それとも、無袖化はいずこかにその発信源があり、そこからの外的な影響として捉えるべきなのか、という問題である。仮に後者の場合、その外的な契機がどこに由来するのか、という問題を次に導き出すことになる。1A類は、石室構造・石室配置の両面において非在地的な要素を色濃く示すことは、先述のとおりである。これらの要素が近畿中央部に通有のものとして考えられる可能性を指摘した（註2）。しかし、「近畿中央部」と一括した内実については、今回十分に検討することができず、いまだ不明確なままである。この点については、個別地域レベルよりさらに上位の視点に立ち、周辺諸地域での様相を分析する必要がある。

(2)無袖化と小型化

従来、無袖化・小型化は、終末をむかえる横穴式石室の一般的な傾向として評価されてきた。この点は再考を要するように思われる。

第一に注目されるのは、無袖化の契機となった1A類の石室法量が著しく大型なことである。階段式石室のなかにも、1A類の無袖式石室とに比してやや小型ながらもそれに準ずる規模のものを認めうるが、やはり1段階中相から2段階にかけて緩やかな小型化の傾向を指摘することができる。無袖式横穴式石室の場合でも、相対的に小型である2B類の出現、また金屋南1号墳例のような小型化した1A類等の諸点から、小型化する傾向を看取することは可能である。しかし、そのような小型化の流れのなかで1段階新相～2段階になって傑出する1A類の無袖式横穴式石室墳の異質感は払拭し得ない。この点からみれば、無袖化と小型化の相関性は考えにくく、無袖化と小型化という横穴式石室の変化方向が必ずしも同調せず、むしろ跛行的に進行したことを示しているように思われる。さらに1A類の傑出を積極的に評価するならば、この種の無袖式横穴式石室墳の導入が何らかの社会的意義を反映している可能性を想定できる。

(3)石室構築上の〈伝統〉の評価

1A類無袖式横穴式石室墳は、当該地域において受容されるとほぼ同時に2B類へと変容する。その背景には、先行する階段式石室の石室構築原理が存在したことを推定した。これを〈伝統〉という言葉で表現した。それは単に構築技術レベルの一貫性というよりも、むしろ従前の階段式石室において種種執り行われた埋葬習俗に関する思想的なレベルでの継続性--埋葬空間へは〈降りていく〉ものであるというイメージの継続性と考えられる。さらに、こうした埋葬儀礼の場としての空間認識を一環して石室形態に反映させていく現象からは、当該地域集団の完結性とともに、それを可能にする石室構築の再生産システムが確立されていたことを意味するように思われる。

以上、冗長な議論を続けてきたが、なお取り残した課題は多い。いずれも今後に検討を期したい。

註

1．2類の素掘り墓道との分離が問題となるが、墓道長と石室長との割合（墓道長／石室長）が2類の場合0.3以上に及ぶのに対して、1類の場合0.1未満であり、比較的明瞭に分別できる。

2．このことは、1A類の石室墳がダイレクトに直接近畿中央部より伝播したことを示す訳ではなく、いくつかの中継地を経ている可能性を否定しているのではない。

編　集　後　記

『紀要』の第10号をお届けいたします。

本号には多数の寄稿をいただいたため、紙幅の関係上、体裁を若干変えざるをえなくなりました。見にくい点等があろうかと思いますが、どうか御了承下さい。

さて、本号をもって、この『紀要』も10歳を迎える事になりました。ここに至る間には、多くの方々の御指導・御協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。今後とも職員の研究活動の拠点として、さらに研鑽をつんでいきたいと考えておりますますので、皆様からの積極的な御叱正・御鞭撻を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

(T・M、T・T)

平成９年３月

紀　要　第10号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL：(0775－48－9780)

印刷・製本：明文舎印刷商事株式会社
滋賀県長浜市森町中久保386